

生田緑地におけるニホンミツバチの生態観察記録

本郷智子*・渡邊友貴**・川島逸郎***

Some ecological observations of Japanese honeybee, *Apis cerana japonica* Radszkowski, 1887 (Hymenoptera, Apidae) in Ikuta Ryokuchi Park, Kawasaki City

Tomoko Hongo*, Tomoki Watanabe** and Itsuro Kawashima***

ニホンミツバチ *Apis cerana japonica* Radszkowski, 1887 は日本全土に分布する(多田内・村尾(編), 2014) 在来種(渡辺・長瀬, 2022)で、樹洞や墓石などの石の隙間、住宅の屋根裏や床下などに営巣する(藤丸, 2014)。神奈川県内ではごく普通種で、生田緑地においても記録がある(脇, 2002; 2003)。

しかし、きわめて普通種で個体数も多いことから、営巣や分蜂(巣分かれに際してみられる新女王を中心としたワーカーの引っ越し集団)などに際して一般的な注意喚起や警報がなされることはあるものの(例えば、川崎市健康福祉局保健医療政策部HP)、その生態的な知見が自然科学における正式報告がなされる例はむしろ少ない。こうしたことから、今回、2022年度に生田緑地で得られた分蜂群などの観察例を記録しておくこととした。

観察記録

1) 枅形七丁目(生田緑地・青少年科学館中央広場), 15-IV-2022, 本郷・渡邊目撃/撮影(図1, 2)。

川崎市青少年科学館に面したヒマラヤスギ *Cedrus deodara* の横枝に、前日まで見られなかったこぶ状の塊または実のようなものが垂下していたため、望遠レンズで撮影した写真を拡大して確認したところ、本種の分封蜂球(分蜂)であることが判明した。2022年4月30日に再度確認したところ、この蜂球はすでに消滅していた。

その後、この時の集団であったかは特定できないものの、すぐ近くの枅形七丁目(科学館前から七草峠に向かう道の東屋付近)のコナラ *Quercus serrata* の樹洞に、本種が営巣していた。この巣孔周辺を、オオスズメバチ *Vespa mandarinia japonica* Radoszkowski, 1857 等のスズメバチ類が飛ぶのを見かけた。



図1. 分蜂群 (15-IV-2022, 渡邊撮影)。



図2. 分蜂群(図1)の一部を拡大 (15-IV-2022, 渡邊撮影)。

2) 枅形七丁目(生田緑地・青少年科学館中央広場脇), 28-VII-2022, 本郷目撃・撮影(図3, 4)。

2022年7月28日の午後、生田緑地を巡回中の職員から「蜂球が見られる」との情報提供があり、その後の観察を行った。営巣場所は斜面に生じた樹洞で、やはりスズメバチ類が多く飛来していたため接近しての観察は控えたが、巣穴から少し下に球状のものができており、そこにさらに本種のワーカーがさらに集まるとともに、その直径は少しずつ大きくなっていった。この蜂球を観察し始めてから約20分後、徐々にワーカーが離脱して蜂球は小さくなり、その中から蜂球形成の要因となった本種ワーカーより大きめの昆虫とみられる個体が落下した後、この蜂球は解消した。こうした一連の状況から、塊となったワーカーの集団は、来襲した外敵であるスズメバチ類を熱殺する蜂球であったものと考えられる。

*川崎市青少年科学館(かわさき宙と緑の科学館) Kawasaki Municipal Science Museum

**株式会社 日比谷花壇 HIBIYA-KADAN FLORAL CO., LTD.

***横須賀市長沢 Nagasawa, Yokosuka, Kanagawa



図 3. 樹洞の巣穴 (28-VII-2022, 本郷撮影).



図 4. 巣穴付近から落下した、外敵熱殺蜂球と考えられる塊 (丸印) (28-VII-2022, 本郷撮影).

2022 年 8 月 19 日、午前中に大雨が降った翌日、巣穴の様子を再び確認したところ、本種の姿は見られなくなっていた。消滅した原因が、前日の大雨や連日の猛暑にあったためか、あるいはそれ以前の悪天候の影響かは不明である。

今回報告したニホンミツバチはきわめて普通種であるため、その行動生態の一端が一般にも目撃されることは稀ではない。しかし、緒言でも記したとおり、その普遍性が記録や資料の集積をかえって妨げているとも考えられる。また一方で、近年の気候変動やネオニコチノイド系農薬の問題など人間活動から生じる環境汚染を背景に、これま

での普通種といえども、将来的にそのようではなくなる可能性も孕んでいる。生物や自然環境の変化のありようを着実に捉えることは、都市化が進行し続ける川崎市域にあっても、今なお重要な視点である。こうしたことから、その希少性に関わらず恒常的かつ包括的なモニタリングを継続し、資料や記録を蓄積し続けることが地域自然史博物館の使命の一つと言えるだろう。

引用文献

- 藤丸篤夫, 2014. ハチ ハンドブック. 104 pp., 文一総合出版, 東京.
- 多田内 修・村尾竜起 (編), 2014. 日本産ハナバチ図鑑. 479 pp., 文一総合出版, 東京.
- 脇 一郎, 2002. 生田緑地でのハチ目の採集記録. 川崎市青少年科学館紀要, (13): 93-101.
- 脇 一郎, 2003. 川崎市生田緑地でのハチ目昆虫の採集記録. pp. 218-232, In: 川崎市教育委員会 (編), 川崎市自然環境調査報告 V. iv+8 pls.+567 pp. (CD-ROM), 川崎市教育委員会, 川崎.
- 渡辺恭平・長瀬博彦, 2022. 日本産ハナバチ類の同定の手引き (コハナバチ科の一部、ハキリバチ科、ミツバチ科キマダラハナバチ属を除く). 神奈川県立生命の星・地球博物館 特別出版物 第 1 号, 120 pp., 54 figs., 神奈川県立生命の星・地球博物館, 小田原.

インターネット情報

- 川崎健康福祉局保健医療政策部, online. 生活衛生担当「ミツバチの分蜂について」
<https://www.city.kawasaki.jp/350/page/0000032012.html> (accessed on 2022-May)